

『Fake face, fake fame.』

◇登場人物

・ムツミ

・宗光／みのる

・すじおの女／まさき

宝石店『ジュエリーショップ・ムツムツ』の店内。

店の奥で、ぼんやりと座っているムツミ。

みのる、店内のガラスケースにべったりくっついて、中にある宝石類を見回している。

すじおの女、みのるにべったりくっついて、その様子をビデオカメラで撮影している。

みのる（すじおの女に）どれがいい？

すじおの女、無言でカメラをみのるに向けている。

みのる なにか欲しいものとか、ある？

すじおの女、カメラを下ろし、

すじおの女 私、宝石とか興味ないんだよね。

みのる もし！ 一個だけ選ぶなら、どれ？

すじおの女 え？ うーん。これかな（ディスプレイの端の方を指す）

みのる、指された宝石をジロジロ見る。

みのる なんでこれ？

すじおの女 なんか、一番ショボいから。

みのる ショボいのがいいの？

すじおの女 ショボいものを格好良く身に付ける方が、お洒落でしょ。

みのる ふーん。

間

すじおの女 あのださ……。

みのる はい？

すじおの女、カメラを構えてみのるに向ける。

すじおの女 はい、そろそろセリフ言ってくれ。

みのる へ？

すじおの女 あんたの素の会話つまんないし。

みのる ……はあ。

間

みのる、キョロキョロしだす。

すじおの女 忘れたな？

みのる いや、そんなことない。ためてるの。

すじおの女 じゃあ……。

みのる うん。

間

すじおの女 忘れたな？

みのる 忘れてない……忘れた。

すじおの女 もう。しっかりしてよ。

みのる すいません。でも、これドキュメンタリーなんでしょ？ セリフ

って必要なの？

すじおの女 ドキュメンタリーも「作品」だからね。わかる？

みのる ちょっとわかる。だいぶわからない。

すじおの女 例えば、レタスを畑から採ってきて、そのまま食べたとして

も、ただのレタスでしょ？ でも、レタスを洗って、皿に盛ってドレ

ッシング掛けたら、それはサラダになるじゃん。そしたら一応、料理

として人前に出せるでしょ？ ドキュメンタリーも一緒に、素材だけ

じゃ映画になんないの。

みのる うーん。

すじおの女 真実だけ映しても、何も面白くないってこと。

みのる 話が難しいよ。

すじおの女 そんなことないよ。ダイヤモンドだって、磨くから綺麗に輝

くって話よ……まあ、その原石が本物のダイヤモンドだったらの話だけ。

ムツミ、「本物」というワードにピクツと反応。

ムツミ（急に立ち上がり）本物ですよ！

みのる（驚く）うわっ！

すじおの女、咄嗟にカメラを隠す。

間

すじおの女 はい？

ムツミ ……あ、いえ。なんでもありません。いらっしやいませ。

すじおの女 あ、はい。

間

すじおの女、ムツミには見えないように撮影する。

ムツミ あの時……。

すじおの女（カメラを隠し）はい？

ムツミ あの時……本物ですよ？

すじおの女 はい？

ムツミ いえ、さっき、ダイヤが本物かどうか、って話をしてたので。

すじおの女 え？ ……ああ。

ムツミ ちゃんと本物ですよ。ちゃんと天然石のダイヤモンドですし、ち

やんとこのブランドの正規商品です。鑑定書だってありますし。

ムツミ、鑑定書を取り出しってきてすじおの女に見せる。

すじおの女 はあ。

間

ムツミ ね？ 本物でしょ？

すじおの女 あの、別に疑ったりしていませんよ。

ムツミ え？・・・は、はは、ははは（笑い）。そうですよね、私ったら何してんでしょね。お客様、素直な顔をされてますもんね。

突然、携帯電話の着信音。

みのる、電話をとる。相手はまさきだった。

すじおの女は、いつのまにかまさきになっている。

みのる もしもし？

まさき おい、いまどこにいる？

みのる 宝石屋。

まさき 時間かかり過ぎなんだよ。ただ視察するだけだろ。

みのる 刺殺なんて、それはやり過ぎだろ。第一、刃物とか持ってないよ。

まさき 刺し殺す方じゃねえよ。現場見たら、すぐ戻って来い。

みのる でもまだ撮影が・・・。

まさき いいんだよ、そんなのは。早く来い。

まさき、電話を切るとすじおの女に戻る。

みのる、携帯電話をしまい、

みのる もう戻って来いって。

すじおの女 え？ もう？ じゃあ戻って。私店の前で待っておくから。

お店の周辺も撮影したいし。

みのる わかった。

二人、店を出て行く。

ムツミ、二人の背中に向かって頭を下げる。

ムツミ ありがとうございます。

ムツミ、元いた椅子に座る。

間

宗光、お店に入ってくる。

宗光 ただいま帰りました。集金完了です。

ムツミ（暗い）おかえりなさい。

宗光 なに？ どうしたの？ なんかあった？

ムツミ あーあ、整形しようかな。

宗光 なになにに、どーした？ 誰かにブスとか言われたか？ 誰だ！ 私

の妻にブスなんて言ったヤツは！

ムツミ 私よ。

宗光 なに？ 貴様か！ 許さーん！・・・なにがあったの？

ムツミ 疑われた。

宗光 誰に？ 何を？

ムツミ あなた、さっきから質問ばかり。

宗光 君がそうさせてるんだろ。

ムツミ このダイヤ本物かどうかって話を、お客さんがしてたの。

宗光 まさか。何かの聞き間違いじゃないのか？

突然、店の外で、自動車のブレーキ音がけたたましく響く。

そしてすぐに、ドンという大きな衝突音が続く。

ムツミ、音のする方を気にしている。

宗光、音に気付いていない様子。

宗光 どうしたの？

ムツミ なんか、スゴい音したから。

宗光 え？ 何かの聞き間違いじゃないのか？

ムツミ 嘘！ 聞こえなかったの？

宗光 聞こえないよ！ 君はさっきから、幻聴ばかり聞いてるんじゃないか？

ムツミ 嘘？ そうなのかな。

宗光 きつと疲れてるんだ。しばらく、店を休みにしてみようか。

ムツミ ダメよ、今休んだら、ますます怪しいじゃん。なにか隠そうとし

てるみたいで。

宗光 でも君の身体が心配だ。

ムツミ 身体は大丈夫よ。でもどうしよう。そのお客さん、なんかココソ撮影してるような感じだったし。もしバレたら、わたしたち終わりよ？

宗光 大丈夫だよ。君の腕は確かだ。どう見ても本物にしか見えない。

ムツミ でも・・・。

宗光 もしバレたとしても、君のその技術があれば困ることはない。きつとどのメーカーからも引く手あまただよ。

ムツミ ブランド品のコピーばかり作ってた贋作師を、どこのメーカーが雇ってくれるわけ？

宗光 そんなの、経歴書き換えりや何とでもなるよ。ほら、僕は文書偽造のプロだよ？ 安心しなよ。それに、今度は模造品じゃなくて、本物

だけ売る店を作れば良い。君自身がデザイナーで、君自身がブランドだ。

ムツミ 無理よ。

宗光 なんて？

ムツミ いまだって、私がデザインしたアクセサリー、この店のオリジナル商品ってことで並べてるじゃない。いったい何人のお客さんが買っていったと思う？ ゼロよ？ ゼロってわかる？ 誰にも売れないの。誰も欲しがらないのよ、私が作ったものなんて。

間

ムツミ 確かに、こんな有名なブランド品と一緒に店頭に並んでたら、絶対そっちにいつちやうことはわかるけどさ、だからその分安くしてるじゃん。はつきり言つて、ブランドものより、オリジナルの方が作るお金かかるのよ。でも安くしてる。でも誰も買わない。なんで？

間

ムツミ はあ、整形しようかな。

宗光 それとこれとは今関係ないんじゃないかな。

ムツミ 鬱陶しいなあ（宗光を睨みつける）。

間

宗光 値段を、あげてみようよ。

ムツミ え？

宗光 例えばさ、量販店なんかでプライベートブランドってあるだろ？

あれは普通、メーカーの商品より安くなってる。なんでプライベートブランドの商品が売れるかって言ったら、安いからだよ。お客さんは、安いものが欲しいんだ。

ムツミ じゃあ値上げしちやダメじゃん。

宗光 でも、宝石に関しては、お客さんは、安いものじゃなくて、イイものが欲しいんだ。「イイもの」の判断基準は？ 値段でしょ？ 値段が高けりゃ、「イイもの」でしょ？ だから、君のデザインしたこのアクセサリーを、他のものと同じくらいの値段で販売するんだよ。

ムツミ え、でも。

宗光 いいじゃん、どうせ売れてないんだし。

ムツミ もうちよつと傷つかない言い方なの？

宗光 ほら、値札変えちやうよ。

宗光、オリジナル商品の値札を張り替える。

宗光 これであとは、デザイン勝負だ。

ムツミ そういうもんかね？

ムツミ、外の様子をチラチラ窺う。

宗光 どうしたの？

ムツミ いや、なんか外に人がいっぱい集まってきてる。

宗光（外を見て） 本当だ。

ムツミ、あごで店外を指す。

宗光、頷き、店の外へ。

入れ替わるように、サングラスをしたまさきが店に入ってくる。まさき、店の外に向かつて大袈裟に手招きし、それに従うように、サングラスをかけ、手提げ鞆を抱えたみのが入ってくる。ムツミ、その一部始終を静観している。

まさき いいか？ なんか知らんが外は大変なことになってるから、今の

うちにある分全部かっぱらえ。

みのる でも、カメラマンが……。

まさき(外の様子を気にする素振り)まったく、何やってんだよ。いいよ、先にはじめておこう。

二人、いざ盗難をはじめようとする、ムツミとぼつちり目が合う。

間

まさき、気まずそうな表情。

みのる、ぼけつと突っ立っている。

まさき あの……

ムツミ いらつしやいませ。

まさき あ、ああ。ああ(安堵)。いらつしやい、ました。

ムツミ なにか、お探しですか？

まさき え……？(みのるに)おい、やるぞ。

みのる え？

まさき(みのるに手を出し)銃。

みのる きゆう。

まさき バカ！ 銃を貸せよ。

みのる、手提げ鞆をカウンターの上に置き、中から銃を一丁取り出し、まさきに手渡す。

それと一緒に、しおりも一部取り出し、ページをめくっている。

まさき(ムツミに銃口を向け)ごめんね、お姉さん。俺たちのお願い、聞いてくれるかな。

ムツミ(呆然と)……え？ なに？

まさき 店に……

みのる(かぶせて。棒読み)宝石を、よこせ。

ムツミ、次第に恐怖を自覚し、喚きだす。

ムツミ やめて！ なに！

みのる(台本を棒読み)なにも、しなければ……ちがう。おとなしくしていれば、なにも、しなければ……ん？(まさきに)この台本おかしくね？

まさき いいよ気にすんな！ ごめんね、お姉さん。じっとしててくれよ。

ムツミ、金切り声で叫ぶ。

まさき ちよつと！ もう！

突然、遠くからパトカーや救急車のサイレンが聞こえてくる。

まさき え？ 嘘？

まさき、店の外へと走る。

すぐに顔を出し、

まさき おい、逃げるぞ！

みのる ほら、逃げるってよ。

まさき お前だよ！

みのる (振り向き) 俺？

まさき 逃げ！ 捕まるぞ！

みのる え、でもまだ、なにも盗ってないし！

まさき いいから！ 今はとにかく逃げろ！

みのる え、ええと(あたふた)。

まさき もう、先に逃げるからな。

まさき、走り去る。

みのる、ムツミにゆっくりと近づく。

その間にも、サイレンの音は近づいてくる。

みのる あの。

ムツミ (震えた声で) はい。

みのる 一つだけでいいんで、盗んでいってもいいですか？

ムツミ へ？

みのる プレゼント、したいんです。

ムツミ (弱々しく) ああ、はい……。

みのる、ガラスケースの中を品定め。

すじおの女、カメラを持って店内に入ってくる。

すじおの女 ちょっと！ いまスゴいの撮れたわよ！ いきなり道路に

人が押し倒されてさ……

みのる (さえぎって) ちょっと！ いま入ってこないでよ！

すじおの女 (まくしたてるように) スゴいだって！ で、その押し出し

た方の男は走って逃げただけど、その走り方が欽ちゃん走りなの！

それで、スゴい速いの！ ヤバくない？ これ！ とんでもないよ！

みのる ごめん、俺いまそれどころじゃないんだよ。

すじおの女 なによ、ノリ悪い。私その欽ちゃん走りの男を追ってくから

さ、先に倉庫に戻ってて。

みのる わかった。

すじおの女、店を出て行く。

間

みのる、微笑しながら、ムツミと目を合わせる。

みのる 彼女に、プロポーズをしようかと思って……。

ムツミ (怯えるように) はあ……。

みのる、品定め。

オリジナル商品の棚にさしかかると、急に視線の動きを止める。

みのる これにします！ (ガラスケースの中を指す)

間

ムツミ え？（急に晴れやかな顔）これ、ですか？

みのる はい。これください。

ムツミ ……はい！

ムツミ、指されたアクセサリーを取り出し、みのるに手渡す。

ムツミ どうぞ。

みのる ありがとうございます。

みのる、出口へと走り出す。

ムツミ あの…。

みのる はい？

ムツミ ありがとうございます。

みのる どういたしまして。

みのる、店の外へ掛けて行く。

ムツミ、嬉しそうに店の中を歩き回る。

サイレンが大きくなり、止まる。

宗光、店の中に戻ってくる。

宗光 大変だよ。店の前で人が轢かれちゃってさ。

ムツミ（ニヤニヤしながら）そう。

宗光 なに？ なんて嬉しそうなの？

ムツミ 私、整形しようかな？

宗光 さっきと明らかにテンション違うけど。なに？ 誰かにキレイとか言われた？

ムツミ あなたさっきから質問ばかり。

宗光 だから君がそうさせるから。

ムツミ 宝石がね、盗まれたの。

間

宗光 は？

ムツミ 盗まれたのよ！ 私のアクセサリーが！ ついに！ やったわ！ やったわ！

宗光 ……うん。君が幸せなら、それでも良しとしよう。

ムツミ やったー！ やったー！

ムツミ、万歳を繰り返している。

照明F・O  
了